

第3回

北海道におけるシーニックバイウェイ制度導入モデル検討委員会

議 事 要 旨

会 場：国土交通省北海道開発局 10F 会議室（札幌第1合同庁舎）

日 時：平成 15 年 7 月 2 日（水）10:00～12:00

1. 第2回委員会議事概要について
2. 議 事
 - (1) 活動団体の応募結果及び認定について（資料1）
 - (2) 今後の制度設計に向けた評価について（資料2）
 - (3) その他

1. 出席委員（五十音順、敬称略）

- 委 員 石田 東生 筑波大学社会工学系教授
石山 醇 （社）日本旅行業協会理事・事務局長
稲村 健蔵 （社）北海道観光連盟副会長
臼井 純子 （株）富士通総研 P P P 推進室室長
東村 有三 （株）C.S.P.T 地域計画機構代表取締役
麦屋 弥生 （財）日本交通公社地域調査室室長

2. 第2回検討委員会議事概要について

ホームページ <http://www.mlit.go.jp/hkb/scenicbyway/index.htm> にて公開中

3. 決定事項

- ・ 活動申請書が提出された 32 の活動団体は全て認定された。
- ・ 制度設計に向けた評価については、診断実施者、診断対象、診断方法および内容等さらに検討することとした。

4. 議事内容

(1) 活動団体の応募結果及び認定について

活動団体の応募結果について、事務局より説明を行った。

- 石田委員長 活動目的、活動内容など多様な団体からシーニックバイウェイのベクトルに沿った形で応募していただけたと思う。
- 東村委員 各団体に理念が伝わっているか課題ではあるが、活動団体を重視すれば多様な団体があってよい。個別の方針は見えているので、今後、コリドーやルート全体で共有化していくことが重要である。
- 白井委員 各活動団体における本年度の活動目標を定めることで、目標の達成度合いを確認できる。目標設定について事務局で指導して欲しい。活動団体には任意団体が多く、資源が潤沢でないところも多い。このような活動の支援体制について、リソースセンターの役割と共に検討が必要である。
- 石田委員長 時間的な制約が厳しかった状況で、活動団体の感触はどのようなものだったか？
- 事務局（宮武） 予想以上に多くの団体から申請があがってきた。この結果、事務局の人員に限られる中で地域の熱い思いに対して応えてきた。各団体によって計画性に違いがあり、それらに的確にアドバイスやフォローをしていく必要がある。
- 麦屋委員 活動団体の強い思いを美しく個性的な北海道づくりにつながるように上手にアドバイスしていくことが大切であり、継続性と活動内容についてより充実したものになるよう、委員会とリソースセンターで応援する必要がある。
- 白井委員 今回は32団体の応募があったが、今後活動団体の数が増えてきた時にはリソースセンターの役割が非常に増えてくるため、効率的な対応策を考える必要がある。
- 稲村委員 北海道には観光ボランティアが多数おり、その方々とのネットワークづくりも大切。
- 東村委員 ボランティアとの連携は各地区任せて、うまくネットワークづくりを進めていくのがよい。
- 石山委員 活動団体の活動そのものが継続していくためには、地域にどれだけの位置付けられ、役に立っているかという視点を大切にしたい。
- 東村委員 活動団体はまだ地域の中の点となっているが、これから広がって大きな団体になることもあるだろうし、また、NPO法人になる任意団体もあるだろうし、今後2年間で見ていく大事なポイントである。
- 稲村委員 モデルルート上の道の駅は、情報発信基地として位置づけられるといい。

- 麦屋委員 シーニックバイウェイ北海道というのは、これまで道路にあまり関わりを持ってこなかった人たちを巻き込み、新しい事業として広げていくべきだと思う。
- 臼井委員 景観改善など物販ではない活動している団体が多く、このような任意団体が将来的にNPO法人に認可されるような支援できるといい。
- 稲村委員 道の駅を最大限に活用して、情報発信基地できるといい。道の駅の集客力を利用すれば、情報発信の発想が変わってくるだろう。
- 石田委員長 シーニックバイウェイに関する一般からの問い合わせに対して、関係行政機関が迅速に対応できるよう窓口を整理するよう努めていただきたい。
- 稲村委員 自分達の手で地域を作っていくという発想をする人が、地域から出てきたことが大事であり、この活動団体を育てることが一番大事だと思う。自治体もNPOなどの支援には苦労していると聞いている。
- 東村委員 既存の活動団体と新しくできた活動団体の方々が、どのように役割分担をしながら活動していくかポイントになる。
- 臼井委員 最近では、自主運営を前提としてNPO等を作っている傾向が強い。みんなの善意からビジネスにつなげていく。そういう一生懸命やっていきたいという人たちをできるだけ多く見つけて、育てていけるといい。
- 麦屋委員 リソースセンターを支えるという話で、多少時間はかかるかもしれないが、活動団体が育ってくるとリソースセンターを代替できる団体が出てくるだろう。また、リソースセンター自体を財政的に自立すべきである。
- 石田委員長 リソースセンターのあり方についても、この2年間で、事務局と検討しながら委員会として提言する方向で進めていく。
- 稲村委員 今回のモデルルートでの試行により、道路と地域がどのように共存していくか真剣に語る人たちが増えていることから、地域の人たちの視点も変わりつつある。
- 石田委員長 活動団体については、これからの活動と実践の中でさらに改善していくべきである。今後は、支援の方法が課題である。
今回応募のあった活動団体に対して全て認定することとする。
(一同異議なし)

(2) 今後の制度設計に向けた評価について

評価の目的、基本方針、地域資源の診断、活動団体の診断について事務局より説明した。

- 石山委員 第三者評価には、定点観測的なものが必要。1年とか2年に一度、定期的に評価を行う手法を取り入れるといいのではないかと。
- 麦屋委員 シーニックバイウェイは、人が迎えるホスピタリティをハードの部分で

表現できる仕組みだと思う。つまり、景観を良くすることでおもてなしの心を表現しているといえる。

- 石山委員 販売員や従業員の対応という部分でのホスピタリティは重要な要素である。
- 東村委員 企業のホスピタリティは、制度で扱うホスピタリティではなく、企業の従業員教育の事業である。そのような教育をさせるようにシーニックバイウェイ制度が仕向けるべき。
- 石山委員 地域資源の分類において、人的資源は地域資源という細目ではなく、地域資源の分類の項目に入るのではないか。
- 石田委員長 人的資源については、資源と表現したときに固定、普遍という感じがする。とりあえずは、文化資源のうちの人的資源という位置付けにしておきたい。将来的な課題として、アメリカのシーニックバイウェイプログラムに盛り込まれていない理由を調査する。また、プロからみたいい情報を提供するマップ等も見栄えするものにすることが重要である。
- 麦屋委員 シーニックバイウェイという制度の中に、観光産業に携わる人たちも住民の一人として参加しながら、自分達の地域の再発見などができるといい。
- 稲村委員 美瑛や上富良野周辺では、地域名がブランド化してきたことによって、本州から観光客が訪れ、結果として農業生産が伸びていることを、地域の人たちが自覚しだしている。道内には休耕田も多くなっており、これにボランティアが関わった利用策なども検討が必要である。
- 石田委員長 シーニックバイウェイの制度を通して結果的に地域の意識改革を行っていくことは目標とすべきことである。
- 麦屋委員 画一的にならないための固有の景観といったときに、活動団体のエリアでそれぞれ持っているコンセプトづくりはワークショップを開催するなかで作りあげていくのか。
- 東村委員 今後の地域協議会などで活動団体が共同でできることやコンセプトなどを話し合うことになると思う。
- 石田委員長 ルート全体のコンセプトは、ある程度活動を踏まえた上でなければ評価できないのではないか。活動を踏まえた上で評価シートを作っていただくことにしたい。調査票については、委員長と事務局にいちにんいただきたい。

次回委員会は、評価の進め方などの状況を判断し、後日開催を決定する。